

2章 総合問題2

問題

【1】

解答

- (1) ①「全訳」の下線部①参照。
④「全訳」の下線部④参照。
⑥「全訳」の下線部⑥参照。
- (2) e (3) e (4) c
- (5) ⑧ e ⑨ d ⑩ e ⑪ c ⑫ c

解説

(1)

① ○ have only to ... 「…しさえすればよい」= only have to ...

○ barely 「かろうじて；やっと」

※ hardly, scarcely は、「ほとんど…ない」という否定的な意味に重点があるが、

barely は「やっと〔かろうじて〕…する」という肯定的な意味に重点がある。

○ readable = easy or pleasant to read

④ ○ the reason for which a book is read < a book is read for the reason

determines { the way it is read
 and
 < to some extent >
 the degree of illumination it is possible to get from it

the way it is read は the way (that) it is read の関係副詞 that が省略されたもの。

今日の用法では the way how は不可。< it (= the book) is read *in the way*

○ to some extent 「ある程度」= in a certain degree

cf. to a great extent (大いに；非常に)

○ degree 「程度；度合い」

○ illumination 「啓蒙」

○ illumination (which) it is possible to get from it (it = the book)

⑥ ○ not always ~ 「必ずしも～ではない」(部分否定)

(2) ○ illiterate 「読み書きのできない人」⇔ literate

a 「読み書きが好きな人」

b 「文学に無関心な人」

c 「文学に関心のある人」

d 「読み書きするのを嫌がる人」

e 「読み書きができない人」

- (3) the next season's list (of modern written literature) と補って読む。「次のシーズンに出版される現代文学」の意味になる。本は次々と出版されるので、新しく出版される本に「道を譲る」ために忘れられるのが期待されるという文脈にする。
- a ○ make an example of ~ 「~を見せしめにする」
= punish (a person) as a warning to others
○ example = warning
 - b ○ make the best of ~ 「~を最大限に利用する」
 - c ○ make up for ~ 「~の埋め合わせをする；~を償う」
 - d ○ make use of ~ 「~を利用する」
 - e ○ make way for ~ 「~に道を譲る」
- (4) ○ a helpful term 「役に立つ言葉」
- a 「違う条件が他の買い手たちから提案された。」
 - b 「彼の任期は7月で終わる。」
 - c 「簡単なことはやさしい言葉で言うべきだ。」
 - d 「春の学期は4月7日に始まる。」
 - e 「我々はまったく平等な間柄であった。」
- (5) 直前の The ability to read ~ the ability to enjoy that kind of pleasure を説明している部分であることを念頭に置く。The ability to read を A とし、the ability to enjoy that kind of pleasure を B とすると、前文で「A はそれだけでは B を保証しない」とあり、それは「~を除けば A が B と何の関係もないからだ」という説明になっている。よって、㉓の it は A、㉔の connection with it の it は B となる。㉕の except that it provides ~ の it は「~を伝達する技術を提供する」の主語なので、「技術」を提供するのは A の方である。伝達するものと、受け取るものは同じものであるから、㉖の it は、㉗の to receive it の it と同じものを指す。また、能力を伝達したり受け取ったりはできないので、この it は that kind of pleasure である。

全訳

大半の人々にとって読書が知的とはいいたい楽しみとなっていて、また同時に出版社の印刷機から絶え間なく出版物が流れ出している時代においては、その目的にかなうためには、㉘書物はかろうじて1回面白く読めるものでありさえすればよい。再読される必要がなければ、将来の楽しみ之源として頭に残る必要もない。したがって、書物が記憶され得るか否かということは重要ではなくなる。そして、文学が記憶させ得るものでなければ、それは何の価値もないものとなる。想像の楽しみを民間伝承文学に頼る完全な非識字者は、単にそれが手に入るという理由であまり面白くない小説を読む生半可にしか読み書きができない者よりも、これだけはるかにうまくいっていることになる。口承の文学は心に残らなければならないのだ。というのも、さもなければそれは忘れられてしまうからである。ところが、現代の文字文学の大半は、次期の出版目録にスペースを譲るために忘れ去られることが期待されている。それが、現代の書物が「古典文学」と本質的に異なっていると我々が感じる1つの理由である。

実のところ、読み書きの能力自体は、手段であって、目的ではない。そして、それは有益

にも、有害にも、そのどちらでもないようにも利用され得る。確かに、書物が読まれる理由には実にさまざまである。④しかし、書物を読む理由は、その本が読まれる方法を決定し、また書物から得られる啓蒙の度合いをもある程度は決定する。もちろん、すべての書物が楽しみのために読まれるはずであるが、いわゆる「楽しみ」という言葉はここでは役に立つ言葉ではない。というのは、「楽しみ」という言葉はあまりに多くの意味を含んでいるからである。楽しみの中には、知的な楽しみ、非知的な楽しみといった多くの種類の楽しみがあり、また、知的な楽しみの中にも、多くの種類があるのだ。⑤文学の鑑賞はきわめて特殊な知的な楽しみを伴い、その楽しみにおいては、必ずしも常に知的な要素が直接表に現れるわけではなく、批評家が想像力と呼ぶようになった能力が、複雑かつ必ずしも常に定義できるわけではない役割を果たしている。読書能力は、それだけではその種の楽しみを享受する能力を保証しはしない。要するに、読書能力がその種の楽しみを受け取ることができる人々に、その種の楽しみを伝達する技術を与えるという点を除けば、読書能力は、その種の楽しみを享受する能力とは取り立てて何の関係もないのである。愛国主義と同様に、読み書き能力はただそれを有しているだけでは不十分なのである。

注

- ℓ. 1 ◇ nonintellectual 「非知的な」 ⇔ intellectual
 ◇ 2つの when … は並列。
- ℓ. 2 ◇ press 「印刷機」
- ℓ. 3 ◇ serve ~ 「～にかなう [合う]」
 ◇ it need not ~, nor does it need to … 「～する必要はないし、…する必要もない」
 ○ 否定文, nor + 助動詞 + S + V 「Sもまた～ない」
 nor = and ~ not …, either
 ※ ‘否定の副詞 + 疑問文の語順’ の形は重要。
- ℓ. 4 ◇ lie in the mind 「頭に残る」
 ◇ It = whether a book is memorable (形式主語)
 ◇ cease to … 「…しなくなる」
 ◇ matter 「重要である」
- ℓ. 5 ◇ memorable 「記憶すべき；忘れられない」
 ◇ nothing 「無価値なもの」
- ℓ. 6 ◇ folk literature 「民間伝承文学」
 ◇ better off < be well off 「うまくいっている」
- ℓ. 7 ◇ semiliterate 「中途半端に読み書きできる人」
 semi- 「半～」
 ◇ available 「手に入る」
- ℓ. 8 ◇ otherwise 「そうでなければ」
 = *if* oral literature did not lie in the mind (仮定法過去)
- ℓ. 10 ◇ in kind 「本質的に」
 ◇ the classics 「古典文学」
- ℓ. 11 ◇ the fact is that … 「実は…；実のところ…」

◇ literacy 「読み書きの能力」

◇ end 「目的」

◇ it can be put to uses

※ put ~ to use (～を用いる；～を利用する) の変形であるが、本文では uses となっていて、具体的な用途を示している。

ℓ. 12 ◇ indifferent 「よくも悪くもない」= neither good nor bad

ℓ. 17 ◇ appreciation 「鑑賞」

ℓ. 18 ◇ in which … の先行詞は the kind of intellectual pleasure.

◇ manifest ~ 「～を明らかにする；～を表明する」

ℓ. 19 ◇ where = in which ※先行詞は the kind of intellectual pleasure.

◇ critic 「批評家」

◇ complicated 「複雑な；難しい」

ℓ. 20 ◇ definable 「定義できる」 < define

◇ by itself 「それだけで」

ℓ. 21 ◇ in fact

① (前言を補足して) 「(見かけとは違って) 実際は」

② (前言を要約して) 「つまり；要するに」= in short

③ (通例、否定文の後で前言を強調して) 「それどころではなく；もっとはっきり言えば」

◇ except that … 「…ということを除いては」

ℓ. 22 ◇ those in a position to receive it = those who are in a position to receive it

○ be in a position to … 「…する立場にある→…することができる (= be able to …)」

ℓ. 23 ◇ patriotism 「愛国主義」

【2】

解答

(1) 「全訳」の下線部④参照。

(2) weighing pros and cons

(3) 内なる声が計算結果は正しくないと告げ、自分の気持ちが計算の結果とは違う方の女性に傾いていることに気づいたこと。

(4) 理由を挙げた人々は、何も理由を挙げなかった人々よりも満足度が低く、選択を後悔していたこと。

(5) maximizers

解説

(1) ○文の骨格は、Two (= S) were (= V) one too many (= C)。

○主語の Two は、前文中の two girlfriends を指している。訳出に当たっては「2人」でよい。

○ however (しかし) は、前文との関係が逆接であることを示す副詞。下線部④のように、前後にコンマを打って文中に挿入して使用することも多い。

Ex. George is a quiet boy. His twin brother, *however*, is outgoing and friendly.

(ジョージはおとなしい少年だ。しかし、彼の双子の兄弟は外交的で人なつっこい。)

- one too many 「1つだけ余分の〔多すぎる〕」: one はどのくらい too many なのかを表している。ここでは one はガールフレンドのことだから「1人」と訳すのが適切。

cf. This tea is *much* too hot to drink. (このお茶はとても熱すぎて飲めない。)

これは much が too hot を修飾している。

- (2) 下線部⑥は、「かつてベンジャミン・フランクリンが似たような状況で甥に勧めたこと」の意。具体的には、フランクリンが甥に宛てた手紙の中で示されている。つまり、疑問がある時には、賛否両方の (pro and con) すべての理由を書き出して、慎重に比較考量して、結論を導く方法のこと。

最終段落から同様の内容を探すと、最終段落第3文に weighing pros and cons (よい点と悪い点を比較検討すること) とあるので、これが正解。フランクリンの手紙の中にある pro and con という表現が大きな手がかりになる。

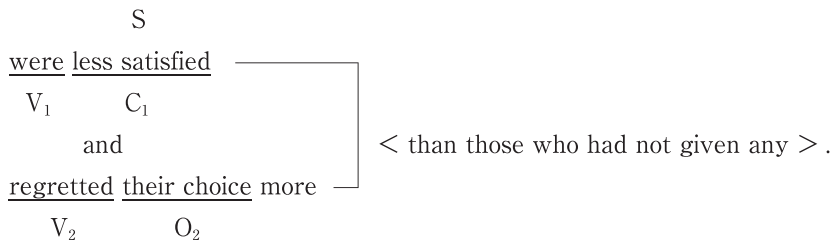
- (3) 下線部⑦は「予期せぬことが起こった」の意。何が起こったかは、後続する箇所注目すると、An inner voice told him that it wasn't right. (内なる声は、それが正しくないことを告げた。) とある。しかし、これだけでは具体性に乏しいのでさらに読み進めると、And for the first time, Harry realized that his heart had already decided — against the calculation and in favor of the other girl. (そして、初めてハリーは自分の気持ちがすでに定まっている——計算に反して、もう一方の女性に傾いている(→計算とは違う方の女性に傾いている)——ことに気がついた。) のように具体的に説明されている。ここまでを含めて解答をまとめる。

Ex. Susan said she was strongly *in favor of* the new peace plan.

(スーザンは新しい和平プランを強く支持すると言った。)

- (4) 下線部を含む文全体の構造は、次の通り。

Those who had given reasons



- Those who … 「…する人々」

Ex. *Those who* were against the plan didn't come to the conference.

(その計画に反対の人々は、会議に来なかった。)

- than 以下は、直前の more だけでなく、less からもつながっていることに注意。この1文全体が、「プレゼントに対する満足度を尋ねられた時に、理由を述べた人々が示した反応」になっているので、were less satisfied 以下をまとめることになる。「理由を挙げた人々は、何も理由を挙げなかった人々よりも満足度が低く、自分の

選択を後悔していたこと。」とまとめればよい。

- (5) 下線部㉔は「常によりよい番組を求めて、リモコンを使ってすべてのテレビ番組を行ったり来たりしてすべてのチャンネルを調べる」という意味。それと対照的な態度が、Or で始まる後続の1文の quickly stop searching and watch a good-enough program (探すのをすぐにやめて、まずまずの番組を見る) という態度。さらに後続する1文中の reported exhaustive search in shopping and leisure が下線部㉔と同じ態度を示していることに気づけば、maximizers (追求者) が正解とわかる。ちなみに maximizers と対照的なのが, satisficer (満足者) である。これは「探すのをすぐにやめてまずまずの番組を見る人」のことである。

全訳

私の親友(名はハリー)には、かつてガールフレンドが2人いた。彼は2人とも愛し、異性として魅力を感じ、敬愛していた。㉔しかし、2人というのは1人余計だった。相反する感情に混乱し、心を決めかねていた時、彼はかつてベンジャミン・フランクリンが似たような状況にある甥に勧めたことを思い出した。

1779年4月8日

疑念があるなら、すべての賛否両方の理由を、隣り合うように2列に紙に書き出し、2、3日間考えたら、代数のいくつかの問題の時と同様の操作をしてごらん。各列のどの理由や動機の重みが等しいか、1対1、1対2、2対3といった具合に、観察するんだ。等しいもの同士を両側からすべて線で消していくと、どちらの列に残りがあるかわかるだろう。(…)重要で不確かな関心事の場合、この種の「心の代数」を私はよくやったよ。数学的に正確とはいかないけれども、極めて有効なものだよ。ついでに言っておくと、このことを身に付けない限り、おまえが決して結婚することはないだろうと心配になるよ。

常に愛情深いおじより

B. Franklin

ハリーは、葛藤を乗り越えるのに論理的な手法があることで、大いにほっとした。そこで、彼は時間をかけて、思いつく限りの重要な理由を書き出し、それらを注意深く吟味して、計算をした。結果を見ると、予期せぬことが起こった。内なる声は、それは正しくないと告げたのだ。そして、初めてハリーは自分の気持ちがちがすでに定まっている——計算に反して、もう一方の女性に傾いている——ことに気がついた。この手法は解答を見つける手助けとなったが、論理性のためではなかった。それは、自分でははっきりしていない理由に基づいて、無意識のうちに決心していたことに気づかせてくれたのであった。

突然の解決に感謝の念を抱きながらも、この過程に戸惑いを覚えつつ、ハリーは慎重に論理的に考えたことに反して無意識のうちに選択することがどうして可能であったのか自問してみた。論理的思考がいわゆる直観と対立することがあることに気づいたのはハリーが初めてではなかった。社会心理学者のティモシー・ウィルソンとその同僚は、ある時、実験に参加してくれたお礼のプレゼントとして、2つのグループの女性にポスターをすすめたことがある。一方のグループでは、各女性は5枚の中から気に入ったポスターをただ選び出した。もう一方のグループでは、1枚を選ぶ前に、各ポスターの好き嫌いの理由を述べるように言われた。面白いことに、両グループは異なるポスターを家に持ち帰る傾向があった。4週間

後、どのくらいそのプレゼントが気に入っているか、全員に尋ねた。理由を述べた人たちは、何も理由を挙げなかった人たちよりも満足度が低く、自分の選択を後悔していた。この場合も同様の実験においても、理由について慎重に考慮することは、あまり幸せにしてくれない決定に導くようである。これは、自転車にどう乗るか、どう自然にほほ笑むかについて意識的に考えることが、自然に行う場合に比べて必ずしもいいわけではないのと同様である。人間の精神の無意識の領域は、我々意識を持った自己が理由を知らずとも、あるいは、ハリーの場合のように、そもそも初めから決定が下されていることに気づかぬうちに、決定を下すことができるのだ。

しかし、内省の能力は人間に固有のもので、それゆえ、一様に有益なものではないのだろうか。というのも、思考について思考することが人間性を規定しているのではないのか。しかし、証拠が示すように、よい点と悪い点について比較検討することがおしなべて人間を幸福にするものではない。ある研究において、夜どのテレビ番組を視聴するかをどのようにして決めるのかや、デパートで何を購入するかといったさまざまな日常活動について質問をした。彼らはリモコンを使って全テレビ番組を次々に行ったり来たりして、常によりよい番組がないかを調べながら、すべてのチャンネルを見渡していたであろうか。それとも、探すのをすぐにやめて、まずまずの番組を見ていたのであろうか。買い物や余暇の時間に、徹底的に調査する人々は「追求者」と呼ばれたが、それは彼らが最良のものを求めようと最善を尽くしたからである。限られた調査しかせず、満足はいく、「そこそこの」最初の選択肢ですぐによしとする人々は「満足者」と呼ばれた。満足者はより楽観的で自尊心と生活に対する満足度がより高いと報告された。一方、追求者は絶望、完璧主義、後悔、自己非難において優っていた。

注

ℓ. 3 ◇ contradict *vi.* 「矛盾する」

ℓ. 6 ◇ set down ~ 「~を書き留める」 = write down ~

ℓ. 8 ◇ algebra 「代数 (学)」

ℓ. 9 ◇ strike out ~ 「~を削除する」 = cross out ~

ℓ. 11 ◇ This kind of moral algebra I have < often > practiced

O S ┌── V ──┐

SVOのOが前に出た形。意味は「この種の『心の代数』を、私はよく実践した」。

◇ dubious *adj.* 「不明な；疑わしい」

ℓ. 13 ◇ apprehend ~ 「~を懸念する〔気遣う〕」 = fear ~

ℓ. 16 ◇ be relieved that ... 「…なので安心する」

Ex. They were *relieved that* the war had finished. (彼らは戦争が終わって安心した。)

◇ formula 「解決法；公式」

ℓ. 22 ◇ obscure 「不明瞭な；あいまいな」

ℓ. 24 ◇ in contradiction to ~ 「~とは正反対に」

◇ deliberate 「慎重な；用心深い；故意の」

ℓ. 25 ◇ the first to ... 「最初に…する人」

Ex. Laura was *the first to* come and the last to leave.

(ローラは最初にやってきて、帰るのは最後だった。)

◇ intuition 「直観；勘」

ℓ. 35 ◇ spontaneous 「自発的な；自然に起こる」

ℓ. 49 ◇ ~, whereas … 「～だが一方…」

Ex. He likes tea, whereas his wife likes coffee.

(彼は紅茶が好きだが、妻はコーヒーが好きだ。)

【3】

解答・解説

- (1) He was (, as it were,) a walking dictionary.
「彼は、言わば、歩く辞書だった。」
○ as it were = so to speak 「言わば」
- (2) Their discussion will (no doubt) continue, but I cannot wait any more.
「彼らの議論はおそらく続くであろうが、私はこれ以上待てない。」
副詞の no doubt は「疑いなく (= without doubt ; undoubtedly)」のような強い確信はなく、「おそらく、確かに」などの意味になることが多い。
- (3) We often (if not always) take freedom for granted.
「たとえ常にではないとしても、しばしば私たちは自由を当然と考えている。」
if not always はコンマで区切ることもある。
- (4) My father must (after all) have a medical checkup next week.
「結局、私の父は来週精密検査を受けなければならない。」
after all はコンマで区切ってもよい。
- (5) Love (, it seems,) has triumphed over virtue.
「どうも愛は美徳に勝利したようだ。」
I think など主節が挿入されることがある。コンマで区切るのが通例。
- (6) Tom (, as it happened,) was not surprised at the scene in the least.
「実際には、トムはその光景にまったく驚いていなかった。」
as it appears, as it seems, as I see it などが挿入されることがある。
- (7) The Internet (as we know it today) traces its origin back to a Defense Department project in 1969.
「今日知っているようなインターネットは、1969年の国防省のプロジェクトに起源を求められる。」
as は接続詞で直前の名詞を修飾する節を導く。
- (8) Jupiter (, the fifth planet from the sun,) is the largest within the Solar System.
「木星は太陽から5番目にある惑星だが、太陽系では最大である。」
Jupiter と the fifth planet from the sun は同格と言われる(同格的挿入)。
- (9) Lily is the girl who (I hear) is very popular with many boys.
「リリーは多くの男の子に大変人気があると伺っている女の子です。」
関係代名詞の直後に I hear が挿入されている。

- (10) It was very cold that day, and (what was worse,) it started to rain.
 「その日はとても寒かった。さらに悪いことには、雨も降り始めた。」
 関係代名詞 what が what is more (その上) とか what is better (さらによいことには) のような挿入句を作ることがある。

【4】

解答

- (1) hand (2) short (3) reason (4) occasion (5) point

解説

- (1) (a) 「君が僕を必要とすれば、いつだって君のそばに行くよ。」
 ○ on hand 「(人が) 近くに居合わせて」
 (b) 「クリスマスはもうすぐだが、メアリーにプレゼントを買ってやる金がいまだにない。」
 ○ at hand 「近くに；手元に；すぐ使えるように」
 (c) 「彼は賢いが、一方では、多くの間違いをする。」
 ○ on the other hand 「一方では」
 (2) (a) 「旅行中に食料が不足するのは嫌だったので、ナップサックに缶詰を入れて持って行った。」
 ○ run short of ~ 「～が不足する」 cf. run out of ~ (～を使い果たす [切らす])
 (b) 「急にビザを取ろうとしてもほとんど不可能です。」
 ○ visa [vɪzə] 「ビザ」
 ○ at short notice 「予告なしに」
 (c) 「彼は自分の名前が呼ばれるのを聞いた時、急に立ち止まったが、誰も見当たらなかった。」
 ○ stop short 「急に止まる」 short は副詞 (= suddenly ; abruptly)。
 (3) (a) 「多くの人々が捕まったが、彼は年齢のおかげで容赦された。」
 ○ by reason of ~ 「～の理由で」 = because of ~ ; on account of ~
 ○ excuse ~ [ɪkskjú:z] 「～を容赦する」
 (b) 「君が安全に運転できるとわかるまで、彼らが君に運転免許を与えないのは理にかなったことだ。」
 ○ It stands to reason that 節 「…は理にかなっている」 ※ It = that ~
 (c) 「生計を立てるためには、自分に提供されるどんな仕事でも、常識の範囲内で引き受けます。」
 ○ within reason 「常識の範囲内で」
 ○ earn one's living 「生計を立てる」
 will は「その場での決意」を表すので、「つもりだ」という日本語には対応しない点に注意。「…するつもりだ」なら be going to である。
 (4) (a) 「この機会を利用して感謝の気持ちを述べさせて下さい。」
 ○ take the occasion to … 「…する機会を捕らえる」

- (b) 「我が国は侵略されている。この危機に立ち上がろうじゃないか。」
- rise to the occasion 「臨機応変の処置をとる」
 - = show that one has enough ability, energy, etc. for a special event
 - invade ~ 「~を侵略する」
- (c) 「彼らはどちらかと言えばざっくばらんな人々である。彼らは特別な行事がある時にしかネクタイをしめない。」
- on special occasions 「特別な行事の時に」
 - rather 「どちらかと言えば」
- (5) (a) 「もっと先のとがった鉛筆を持っていませんか。」
- with a sharper point 「もっと先のとがった」
- (b) 「彼は必ず私たちの誕生日をそれぞれ覚えるようにしている。」
- make a point of …ing 「必ず…する」
- (c) 「あなたの主張の要点を聞き損ねたようです。もう一度言っていただけませんか。」
- point 「要点」
 - argument 「主張」

【5】

解答

- (1) **b** (2) **b** (3) **b** (4) **c** (5) **b**
 (6) **d** (7) **c** (8) **b** (9) **a** (10) **b**

解説

- (1) 「私は彼が早く出発するよう提案した。」
- suggest [propose] that S (should) … 「Sが…するよう提案する」 → **b**
- 「命令・要求・提案」などを表す動詞・形容詞・名詞の導く that 節中は、助動詞 should + 原形か、または仮定法現在 (つまり, 原形)になる。
- cf. suggest to 人 that 節 (人に…するよう提案する)
- a, c, d** suggest は不定詞を目的語にとらない。
- (2) 「あなたは毎日バイオリンの練習をするべきだ。」
- practice …ing 「…の練習をする」 動名詞を目的語にとる。 → **b**
 - play the violin
- 「楽器」には通例 the が付く。
- 米国人インフォーマントによると、例外もある。以下は、解釈上の知識として読んでほしい。
- ①プロの奏者の場合は the は省略される。
- He plays excellent *rock piano*. (彼はロックのピアノが非常に巧みだ。)
- ②「ある特別の」の意味の場合や、限定的な修飾語句・節を伴う時は a の時もある。
- She hates playing *a piano that is out of tune*.
 (彼女は調子の外れたピアノを弾くのは大嫌いだ。)
- c, d** (×) practice to …

- (3) 「あなたはまもなく私が正しいと納得する。」
 ○ be convinced that 節 [of] … → **b**
 ○ convince A that 節 [of] … 「A に…であることを納得させる」
 convince は直接 that 節を目的語にはとれない。
- (4) 「私は働きに行かないで一日中家にいた。」
 ○ instead of …ing 「…する代わりに」(二者択一) → **c**
a beside [前置詞] 「～のそばに；比べると」
 cf. besides [前置詞] (～の他に；加えて) / [副詞] (とにかく)
 ※副詞の besides の用法に注意。一般に、副詞の besides, = moreover, ; in addition, であると言われているが、besides を副詞で用いると、moreover, ; in addition, では意味がまったく異なるというのが2人の米国人インフォーマントのコメントである。例えば、以下の例では、besides, の代わりに、moreover, や in addition, を用いることは絶対にできない。besides, は、「もしその点が十分信じられないと思うとしても、もう1つ言うことがある」のように、「追加」に「譲歩」の意味を含むのである。
 cf. A : Let's go to Hawaii for a few days.
 B : I could never take the time off. *Besides*, we can't afford it.
 A : (数日間ハワイに行きましょう。)
 B : (休みを取ることはできないだろうし、とにかく、お金の余裕がないよ。)
 この Besides, の同義語は Anyway, である。
b except ~ 「～を除いて」
d without は付随的な条件を表す。
- (5) 「運転している間は、決してドアをロックせずにおいてはならない。」
 on no account 「ゼロの理由で⇒決して～ない」 = not on any account → **b**
 否定の副詞 [句・節] が文頭に出て、その射程が文全体になると必ず、「否定の副詞 + 疑問文の語順」となる。
- (6) 「2月のある寒い夜、彼が突然訪問してきた。」
 特定な日の、朝、午前、午後、夜をいう場合は on を用いる。 → **d**
 cf. 修飾語がなければ at night となる。
a at [時を表す前置詞] 「時の一点」(時制のみならず、1日や1年などのうちにある特定の期間を一種の時点と考慮して、at を用いる。)
c in [時を表す前置詞] 「比較的長い期間」(月、四季、年など)
- (7) ジム：「メアリーは今日来るかい？」
 スー：「たぶん来ないでしょう。彼女は具合が悪いから。」
 ○ I suppose not. = I *suppose* that she is *not* coming. = I *don't* suppose so. → **c**
 cf. I suppose so. = I suppose that she is coming.
- (8) 「彼女がそこに着く頃は、もうほとんど暗くなっている。」
 時を表す副詞節では、単純未来の will は用いず、現在時制で表す。 → **b**
- (9) 「その2つの間に優劣はあまりない。つまり、両方ともつまらない。」
 ○ there is not much [nothing ; little] to choose between A and B

「A と B の間に優劣はあまり [まったく ; ほとんど] ない」 → a

(10) 「数人のメンバーはその決議案に賛同し、それを支持する発言をした。」

○ in favor of ~ 「～に賛成して」 → b

○ resolution 「決議 (案)」 < resolve ~

a for the benefit of ~ 「～の (利益の) ために」

c opinion of ~ 「～という [～に関する] 意見」

d in opposition to ~ 「～に反対して」

【6】

解答

(1) 補う単語 : myself (c) : **イ** (e) : **ウ**

(2) 補う単語 : make (c) : **イ** (e) : **エ**

(3) 補う単語 : it (c) : **イ** (e) : **ア**

(4) 補う単語 : let (c) : **エ** (e) : **ウ**

(5) 補う単語 : much (c) : **エ** (e) : **イ**

解説

(1) I can't get into my room. (私は部屋に入れない。) に続く文を完成させる問題である。

(b) と (c) の間に to があるので, I was ~ enough to ... (私は...するほど ~だった。) の文型を用いればよいと推測でき, まず (b) に **ア** enough が入る。

「自分の部屋に入れない」という情報がすでに与えられているので, (a) に stupid を入れて I was stupid enough to (c) (d) (e). (私は愚かにも...した) となるのがわかる。

残った選択肢は lock と out なので, lock out A [lock A out] (A を締め出す) → lock out oneself [lock oneself out] ((自動ロックがかかり, 鍵を中に置き忘れたまま) ドアを閉めて中に入れなくなる) が続くことがわかる。

ただし, (c) と (e) には **ア**~**エ** に与えられている語句が入るという条件があるので, 使えるのは lock oneself out で, (c) に **イ** lock が, (e) に **ウ** out が入る。oneself は主語に呼応して, ここでは myself となる。

lock oneself out が思いつかなかったという受験生の声を実際に多く耳にした。lock out は学習用の英和辞典には重要度の高い句動詞として載せられている。辞書は丁寧に引くべきである。

(2) Let's not use any of these pictures for the poster. (ポスターには, これらの写真のどれも使わないようにしよう。) に続く文を完成させる問題。

選択肢に look, older, than があり, 2 文の中で複数名詞は these pictures のみなので, They = these pictures と考えられることから, 「写真では彼はかなりふけて見える」という内容が続くことが推測できる。

They (= these pictures) を主語にして, 文を成立させるためには, make を補って, 無生物主語の文にすればよい。したがって,

They *make* him look a lot older than he really is.

ア **イ** **ウ** **エ**

が正解の文となる。

無生物主語構文で使われる動詞はある程度決まっているので、一定量の基本文を覚え込んでおかなければならない。

Ex. Her charm of manner *made* her very popular.

(彼女の態度が何となく人を引きつけるので、とても人気があった。)

This road will *take* you to the station. (この道を行けば駅に出る。)

The wind *blew* a roof from our house. (風で家の屋根が吹き飛んだ。)

The glorious weather *tempted* large crowds of people out of the city.

(快晴に誘われて郊外は大した人出だった。)

The next morning *found* my brother penniless again.

(翌朝、私の兄は再び一文なしになっていた。)

I haven't written to you for sometime but hope this letter will *find* you in good health.

(ご無沙汰しましたが、お元気のことと思います。)

The year 1492 *saw* the discovery of America by Columbus.

(1492年にコロンブスはアメリカを発見した。)

以上の7文は、知らないとまず無理と思われる無生物主語の文。すべて覚えること。

- (3) She is intelligent, but she just doesn't have ~ 「彼女は頭がよいが、～はまったく持ち合わせていない」の～の部分完成させる問題。

選択肢に what が与えられているので、(a) (b) (c) (d) (e) a good journalist は、what が導く名詞節になると推測される。与えられている動詞は take で、It takes A to … 「…するのに A (=必要条件) が必要だ。」となるのを知っていれば、

what it takes to be a good journalist

エ イ ウ ア

「優れたジャーナリストになるのに必要なもの」

を作るのは容易。

この it は、時間・環境を表す非人称の it と同、形式主語の it と同考えることができる。この形は口語でも頻出する。

関係代名詞 what と take のような基本動詞は、東大などの難関大学ではこれまで読解問題でたびたび出題されてきたので、単に訳して終わりではなくて、作文に応用できるくらいになっていることが必要。

なお、与えられている文の just は、否定語の前で用いられて、文の内容すべてを否定し、「少しも…(ない)；とても…(ない)」の意味を表す用法で、重要。

Ex. I *just can't* believe it. (とてもそんなことは信じられない。)

I *just don't* care. (ちっとも気にしじゃない。)

- (4) I'm terribly sorry for saying what I said yesterday. (昨日はあんなことを言ってしまうってどうもすみません。)に続く文を完成させる問題。

お詫びをしている内容で、I shouldn't have … で始めなくてはならないので、shouldn't have 過去分詞「…すべきではなかった(のにした)」の形になると推測できる。

したがって、(a) には過去分詞が入らなくてはならないが、選択肢には過去分詞が与えられていないので、(a) に入る語が補う単語となる。

get がすでに与えられているので、選択肢から、

get the better of という頻出の表現を思いつくのは容易。

○ get [have ; gain] the better of ~

① 「〈人が〉 ~ (=人・議論など) に打ち勝つ」

Ex. In the last chess tournament, the British champion *got the better of* his opponent.

(チェスの最終戦で、英国のチャンピオンが対戦者に勝った。)

② 「〈感情・欲望などが〉 ~ (=人) を支配する」

Ex. Fears *got the better of* her. (彼女は不安の念を抑えることができなかった。)

となると、残っている選択肢は my emotions だけなので、

my emotions get the better of me

と並べることができる。

問題は、(a) に入る動詞の過去分詞だが、これは let O …で「〈人が〉 O 〈物〉が…するに任せる ; O をうっかり…させる」を意味することを知らないと無理。

Ex. I felt a pain in my back but tried not to *let it show*.

(私は背中に痛みを感じたが、顔に出さないようにした。)

したがって、以下のようになる。

I shouldn't have *let my emotions get the better of* me.

イ エ ア ウ

「私は自分の感情に自分を支配させるべきではなかった → 自重すべきだった。」

本間を見てもわかるように、基本語については辞書の例文をかなり読み込んでいないと、短時間で正答に至るのは無理である。

- (5) We've been waiting for you for over an hour. (私たちはもう1時間以上も君を待っている。) に続く部分を完成させる問題。

How (a) (b) do you think (c) (d) (e) to spend on your homework? から、「宿題にあとどれくらいかかっているのですか」の意味で、do you think が挿入されていることに注意。このタイプの疑問文では、

What do you think this is? 「これは何だと思いますか。」の this is のように「平叙文の語順」が続く。したがって、

you will need

エ ウ イ

が続く。

「あとどれくらい」の部分は、How much + 比較級～? のパターンで処理できる。

したがって、

How much longer do you think you will need to spend on your homework?

ア エ ウ イ

が正解の文。

How much + 比較級～? のパターンは盲点。例文を補っておこう。

Ex. *How much hotter* is it today than yesterday? (今日は昨日よりどのくらい暑いのか?)

How much higher is Mt. Fuji than Mt. Chokaisan?

(富士山は鳥海山よりどのくらい高いのか?)

How much longer will we have to work today?

(今日はあとどれくらい働かなければならないのだろうか。)

【7】

A.

解答

- (1) The taller of the two men went out first.
- (2) Please give me two more of the red carnations.
- (3) I didn't know you are [were] so good at cooking.
[I didn't know you are [were] such a good cook.]
- (4) Many people are better off than they used to be.

解説

- (1) 「2つの中でより～の方」は 'the 比較級 + of the two' で表す。「2つの中で」という限定があるので、比較級に the が付くことに注意。したがって、「2人の男のうち背の高い方」は, the taller of the two men となる。「出ていった」は went out, 「先に」は first でよい。
- (2) 「その～をもう2つ」は, more が与えられているので, two more of the ～となり, more two of the ～という語順にはならない。したがって, 「赤いカーネーションをもう2本」は, two more of the red carnations となる。「～をください」は, Please が与えられていることから, Please give me ～. とすればよいことは言うまでもない。
- (3) 「こんなに料理が上手だ」は, be good at ～ (～がうまい) を使って, be so good at cooking とするか, または, 名詞表現を使って「非常に上手な料理人だ」と考えて, be such a good [an excellent] cook とすることもできる。「…だということを(私は)知らなかった」は I didn't know (that 節) となるが, that 節の動詞は, 主節の動詞の時制に合わせて you were としてもよいし, 「現在も変わらない事実」と考えて you are としてもよい。
- (4) 「…の人が多い」は many people を主語にして表現する。「暮らし向きがよい」は, off が与えられていることから, be well off という言い方を思いついてほしい。ここでは「以前よりよくなっている」のだから, well を比較級に変えて, be *better* off となる。「以前より」は, used が与えられているので, used to be … (以前は…だった) という表現を応用して, than they used to be とする。

B.

解答

There are so many stairways in the stations. We average five hundred stairway steps a day.

解説

「駅」はここでは必ず複数形にする。電車を利用するには、乗る駅と降りる駅の最低2つの駅を利用するからである。「階段」は、通路としての階段に重点を置く場合は stairway という。「階段の各段」には step [stair] を用いる。

「1日に平均500段を上ったり下りたりしなくてはならない」の「しなくてはならない」は、義務として、しなくてはならないという意味ではないので、must や have to を用いることはできない。文中の「しなくてはならない」は‘習慣’として行うという意味なので、動詞の現在形を用いなくてはならない。

動詞は、average 1語で「平均して…する」の意を表すことができる。また、「1日に」は「～につき」の意を表す a を用いて a day とする。

Ex. How I wish I *averaged* 100,000 yen an hour. (1時間で10万円稼げたらなあ。)

This car *averages* 45 kilometers to the liter.(この車はリッター当たり平均45キロ走る。)

[8]**解答**

Children who lie and cheat learn it first at home. Hearing their parents say things they know are untrue, children are taking lessons on how to lie. Parents unconsciously shape their children's character every day by their own behavior.

別解

Children learn how to lie when they catch their parents saying what is clearly untrue. Without knowing it, by their own actions parents are forming their children's personality day by day.

解説

「本当でないとわかっていることを親が言うのを聞くと」は、「～を聞いている時に；～を聞きながら」と解釈して when で導かれる副詞節か分詞構文で表せばよい。「親が～を言うのを聞く」を hear を使って表す場合は‘hear + O + 動詞の原形’としても‘hear + O + 現在分詞’としてもよい。「本当でないとわかっていること」は関係代名詞を用いて表すことになる。「わかっている」の主語は「子供」と考えるのが妥当であるが、「明らかに本当ではないこと」のようにすると主語が誰であるかという問題を避けることができる。「嘘のつき方を学んでいることになる」は日本文通り「子供」を主語にすればよい。「嘘のつき方」は how to …の形で表せば簡単。

下線部第2文は、文の骨組みとしては「親は」＋「形作っている」＋「子供の性格を」のSVOの文型以外には考えられない。あとは「自らの行動によって」、「日々」、「無意識のうちに」の修飾語句の問題となるが、修飾語句は修飾される語のできるだけ近くに置くという原則に従って、その表現と語順を考えるとよい。

使える語句・表現は以下の通り。

「親が～を言うのを聞く」hear their parents say [saying] ～が直訳。他には「親が…しているのに気づく；親が…しているのを見つける」と考えて find [catch] their parents …ing とすることもできる。

「本当でないとわかっていること」原文に忠実な訳としては、関係代名詞を用いた things

(which [that]) they know are untrue や what they know is untrue などが考えられよう。あるいは「明らかに本当ではないこと」と考えて what is clearly untrue ; things which are obviously untrue のようにすることもできる。「本当でない」は not true のように否定語を使って表すよりは untrue ; false などの語を使う方がよりすっきりする。

「子供」 children の他に kids や youngsters でもよい。

「～を学んでいることになる」動詞は learn ～とすればよい。その他, take a lesson on ～のようにすることも考えられる。

「嘘のつき方」 how to lie とすれば簡単。

「～を形作る」「性格・人格」などについて言う場合は form ～ ; shape ～などが適切。他にやや意味合いは違うが、「～に影響を与える」と考えて influence ～や affect ～も使える。時制は現在形か現在進行形がよい。

「性格」は personality や character。

「自らの行動によって」 by their own behavior [actions] とすればよい。action は個々の行為を表す言葉なのでここでは複数形にする。一方, behavior は不可算名詞であるから複数形にしない。

「日々」 every day ; day by day などの他に、「少しずつ ; 徐々に」と読み換えて little by little としてもよいだろう。なお, day by day は「日に日に」という‘時の経過’につれての変化を表すのに対し, day after day は「来る日も来る日も」という‘同じことの継続・繰り返し’を表すので混同しないこと。

Ex. It is getting cooler *day by day*. (日に日に涼しくなってきた。)

I think of you *day after day*. (来る日も来る日もあなたのことを考えている。)

「無意識のうちに」1語の副詞で表すなら unconsciously とし、動詞「形作る」の前に置くとよい。句にするならば without realizing [knowing] it のようになる。

【9】

解答・解説

◆は『解体英熟語 改訂第2版』の参照番号を示す。

- (1) (A) break (B) out ◆327
○ break out 「急に発生する」 out は副詞。
- (2) (A) come (B) about ◆328
○ come about 「起こる」 about は副詞。
- (3) (A) give (B) out ◆330
○ give out 「尽きる」 out は副詞。
- (4) (A) show (B) up ◆338
○ show up 「現れる」 up は副詞。
- (5) (A) get (B) along ◆339
○ get along 「人と仲良くやっていく」 along は副詞。
- (6) (A) Go (B) ahead ◆341
○ go ahead 「どうぞそうしてください」 ahead は副詞。

- (7) (A) look (B) out ◆ 342
○ look out for ~ = watch out for ~ 「～に気をつける」 out は副詞。
- (8) (A) sets (B) in ◆ 344
○ set in 「(悪天候・冬などが) 始まる」 in は副詞。
- (9) (A) came (B) to ◆ 348
○ come to 「意識を取り戻す」
to *adv.* 「正常な状態へ」
- (10) (A) named (B) after ◆ 353
○ name A after B 「B にちなんで A に名前をつける」
- (11) (A) take (B) into ◆ 359
○ take into account ~ = take ~ into account 「～を考慮する」
- (12) (A) put (B) into [in] ◆ 360
○ put ~ into [in] practice 「～を実行する」
- (13) (A) reminded (B) of ◆ 362
○ remind A of B 「A に B を思い出させる」
- (14) (A) convinced (B) of ◆ 364
○ convince A of B 「A に B を確信させる」
- (15) (A) asked (B) of ◆ 367
○ ask a favor of ~ 「～に頼み事をする」
- (16) (A) accused (B) of ◆ 368
○ accuse A of B 「A を B の理由で訴える [非難する]」
- (17) (A) deprived (B) of ◆ 370
○ deprive A of B 「A から B を奪う」
- (18) (A) get (B) of ◆ 374
○ get rid of ~ 「～を取り除く」
- (19) (A) prefer (B) to ◆ 382
○ prefer A to B 「B よりも A を好む」
- (20) (A) owe (B) to ◆ 379
○ owe A to B 「A に B のおかげをこうむっている」
it = that 以下。